

受講番号 19009 学校名 岡豊高等学校 氏名 白石 志津

研究の背景

研究対象(学年、クラス等) 1年生(少人数) 生徒数 28名
 科目名 英語 I 単位数(授業時数) 3時間 使用教科書名 Surfing ENGLISH COURSE I(文英堂)

クラスの様子・特徴

40人2クラスを3講座に分割している28人(男子10人、女子18人)。中学校2年生で英語がわからなくなり、英語は嫌いと言った生徒が大半を占める。部活動が忙しいために家庭学習の少ない生徒や英語に対する関心が薄い生徒が多い。

問題の確定

基本的な語彙力や文法が定着していないために、自信をもつことができない。そのため英語をコミュニケーションの道具として考えられない。

予備調査



A 授業の観察	B 生徒による授業評価	C 学カデータ
細かく次々と授業中の活動を変えていくことにより、居眠りをする生徒がいなくなっている。クラスの生徒同士も、それぞれの性格がわかってきたためか、お互いに配慮したり、教え合ったりする姿が見られる。一方で、無駄な話をして、作業に集中できない生徒が特定化してきている。	授業の時間を有効に使い、放課後や休日を学習に充てたくないという生徒の姿が如実に表れている。中学校で行われたものの内、現在役立っているものとして、語彙力や発音、文法項目を挙げた数が多いので、単なる遊びとしての英語ではなく、形として残り、プラスになる英語力を求めていることがわかる。	中間考査を分析した結果、be動詞と一般動詞の混同、一般動詞の活用形未定着、語順の混乱が目についた。

リサーチ・クエスト



楽しみながら、主体的に英語を学ぶ意欲や姿勢を育てるためにはどうすればよいか

仮説・実践・検証



仮説1 語彙や文法事項を覚えるときに音楽やゲームの要素を取り入れれば、楽しみながら取り組むことができるだろう。さらに、それらを効果的に使いこなす指導をすれば、定着するだろう。	実践1 ①毎時間必ず各単元の新出単語の発音練習を行った。楽しみながら練習ができるようにリズム感あふれる曲を選び、練習パターンを工夫した。②授業中の活動を評価するものとして、生徒にポイントカードを渡している。時間を計ってペアで協力して語句整序練習をさせた。時間内に正解したペアにポイントを与えた。③定期テストの範囲の中で、キーセンテンスになっている重要構文の音読筆写をさせた。	検証1 ①生徒から選曲のリクエストがきて、様々な曲で試してみた。生徒同士のペアで行うことで、相手が次に出すパターンが日本語なのか英語なのか注意して聞かないとわからない、「ハチャメチャパターン」も飛び出し、楽しく練習をすることができた。②今年度から授業評価の方法が変わり、授業中での活動が成績に加味されることで、ペアでの活動にも熱心に取り組む姿が見られた。主語・動詞の考え方がほぼ定着したことで、語句整序もミスが少なくなってきた。
仮説2 音読テストを頻繁に行い、評価に取り入れるようにすれば、正確に自信をもって英文を読めるようになるだろう。	実践2 ①1つのパートの英文を暗記させて、教員の前で1人ずつ暗唱テストをした。②フレーズごとに録音されているCDを利用して、CDの英語の真似をさせたものを生徒個別にテープ録音させた。録音した日付を教員がしゃべり、いつの録音かがわかるようにした。	検証2 音読テストや暗唱テストに真剣に臨むことが、授業点だけでなく、定期考査の成績アップにつながるかわかり、熱心に取り組んだ。
仮説3 週1回、ALTとのTTが設定されているのだから、ALTを有効に活用することで、リスニングとスピーキングを鍛えることができるだろう。	実践3 ①英文を前から理解するには、リスニング力を身につけることが大切だと考え、OC Iの授業ではできるだけ限りALTと英語で授業を進めることにした。②英語 Iの内容でALTと共に確認したいものについては、積極的にOC Iの時間に取り入れた。③OC Iの特別授業では、英語 Iで扱った関係代名詞の英文を取り入れ、実際にどのように関係代名詞を使用するのかを確認した。	検証3 ①ALTから直接質問されるということで、一生懸命に話された英語を聴き取ろうとしていた。②わからない言葉を説明するときに、関係代名詞を使ってスムーズに説明することができた。

研究の成果



12月に実施した最終アンケートでは、生徒の反応に大きな変化がみられた。授業で扱う英語の難易度が上がった割には勉強のしかたや英文の仕組みがわかってきた生徒が増えてきており、授業に集中して取り組めてきたと回答している。飽きやすく落ち着きのなかった生徒でも、自主的な学習ができるようになったと書いている。音読を嫌がるどころか、楽しんでいる様子である。何よりもうれしいことは、英語に対する気持ちが変わってきて、英語に対して積極的になったという意見がでてきたことである。

今後の授業改善の課題

進学協議会主催の「学力支援テスト」での結果を見ると、「言語知識」の領域についてのみ、県内はおろか、校内の平均を大きく下回ってしまった。自分の授業を振り返ってみると、項目を丁寧に説明することよりも、まず音(耳)から入っていくアプローチをしていき、理屈よりも前から順番に理解していくことを読解面でも文法面でも取り入れていった傾向がある。「言語知識」の設問の前では、この方法は効果がないのかもしれない。

リサーチについての問合せ先: 職場電話 088-866-1313 電子メール